
バカと幻夢と召喚獣

米田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと幻夢と召喚獣

【Nコード】

N3118Z

【作者名】

米田

【あらすじ】

浮雲大和は、文月学園に転入したがあるミスをしてFクラスに。そして試召戦争に巻き込まれていく。

この小説は明久×瑞希、オリ×優子の夢小説です。

主人公設定（前書き）

この小説は明久×瑞希です。それ以外のカップリングが好きな人はバックしてください。

主人公設定

主人公設定

浮雲 うきぐもやまと 大和 十六歳

家族構成 父 母 祖父 兄弟 妹二人の9人家族。

好きな物 仲間 漫画

嫌いな物 孤独 仲間を大事にしない人

得意科目 日本史と古典に現代国語。古典と現代国語は常に500点台。日本史は調子が悪くて1000点だという……。他の教科はほとんどが400点台。

苦手科目 保健体育、世界史。保健体育は200点台だが、ほとんどが体育の中から。世界史に至ってはギリギリ二桁。

見た目 黒髪に黒目。本人は気がついていないが意外にモテる。

ある事情で、引越してきた。兄のすすめで文月学園に特待生で転入するが、ある失敗をしてFクラスに。また、春休み中に優子と明久に会っている。優子にはあったときに間接を外された。明久とは意気投合し、友だちになった。

明久が瑞希のことを好きなのを知っていて応援している。ちなみに、大和は自分のことについては鈍感。

そして、家では仕事で家にいない両親に代わり、弟たちの面倒を見たり家事をしている。

また彼は幻夢流という剣道の流派の後継者。いつも幻夢という刀（見た目竹刀）を持っている。また、喧嘩の強く、その強さから鬼神と呼ばれている。また、幻神という二つ名がある。

幻夢流 幻覚を使い相手を欺き、戦う流派。移動術もあるらしい。また、大和も知らない奥義があるらしい。

幻夢 幻夢流の後継者が必ず持つ刀。大和は普段見た目を竹刀にしている。また、”染まれ 幻夢”と叫ぶと刀が赤く染まり幻術が強化される。それと同時に大和の目は赤く染まる。また刀の色は人によって違う。幻夢には第二形態がある。

召喚獣 装備 大和をデフォルトした姿に和服（大和の意志により鎧にもなる）に幻夢。

腕輪 ミラージュ 蜃気楼 幻覚を見せる腕輪。

特殊能力 学園長が特待生という事で大和に三つの特殊能力を与えた。

一つ目召喚フィールドの作成。二つ目フィードバックを付けたり無くしたり。三つ目召喚獣を物に触れさせる事ができる。

原作と違う点

吉井明久 大和と出会って、勉強を教わり、成績は良くなりAクラスレベルに。また、大和の祖父に才能があると言われ、幻夢流を習って喧嘩も強くなった。

主人公設定（後書き）

どうも、作者の米田です。監視者と平行して更新していきます。よろしく願います。

第一話「出会い その一」

大和Side

「うっ、どこ？」

俺、浮雲大和は道に迷っていた。色々な事情でこの町に引っ越してきた。兄のすすめで文月学園に入学する事になったのだが……。今日は学園長に呼ばれ、文月学園に行くことになったのだが、文月学園に行く道が分からない。

「どうするかな……。うん？」

ふと、数メートル先を見ると不良達が何かを取り囲んでいた。

『なあ、姉ちゃん俺達と遊ばないか？』

『嫌よ、離しなさい!!』

どうも不良達が嫌がってる女の子を無理矢理連れていこうとしているらしい。

「……助けてやるか」

俺は不良達に近づき、一人の不良の腕を掴んだ。

「おい、やめろよ。嫌がってるだろ」

「ああ、何だ手前は」

何だっって言われてもな……。

「取りあえず、通りすがりのヒーローって名乗っておこうかな」

「な！？ ふざけてんのか？」

不良の一人が殴ってきたが、俺は半歩下がって避けた。そして不良の腹に拳を叩き込んだ。

「ぐおっ！？」

「て、手前！！」

不良の仲間二人が俺に殴りかかってきたが、不良は、俺がいない所に拳を向けた。俺は不良の一人には蹴りを、一人には拳をお見舞いした。

「な、何なんだよこれ？」

「説明しても良いけど、分からないと思うよ」

「く、覚えてろ！！！！」

うん、漫画の悪役みたいだね。

「さてと、どうするか？」

「ねえ」

早く文月学園に行つて早く用事を終わらせよう。

「ねえ」

でも、行き方分からないんだよね。ああ、早く帰ってフェアリーテイルの続き読みたいな。

「ねえ」

さてと、どうするか……。

「……人の話を聞きなさいよ!!」

ゴキンっ!!

「グワッ!! 俺の間接が!!」

何だ? 何が起きたんだ!? 取りあえず。

ゴキン。

「ふう、元に戻った」

「……無視しないでよ」

うん?

後ろを振り返ると……。

「……」

「何よ」

凄い可愛い女子がいた。

「嫌、別に」

「なら、良いけど」

つつかこの子が間接を外したのか？

「取りあえず、ありがとう」

「嫌、別にお礼なんていいよ」

「そう？」

まあ、良いか。そんな事より。

「あのさあ、ちょっと聞きたい事があるんだけど良いかな？」

「うん？ 何？」

「文月学園に行くにはどうしたら良いかな？」

「それなら、この道をまっすぐ行って信号の所で右に曲がって、更に真っ直ぐ行けば着くわ」

「そうか、ありがとう」

助かった……。

「ねえ、あんたも文月学園の生徒？ 会ったこと無いんだけど？」

「ああ、俺は転校生だから。君も文月学園の生徒なんだ」

「ええ、アタシは二年生になるんだけど、あんたは？」

「俺も二年生だ」

同じ二年生なら会えるかもな。

「へえ、そうなんだ。アタシは木下優子。あんたは？」

「俺か？ 俺は浮雲大和」

また、会えるかな？

俺は、文月学園に向かった。

優子Side

「浮雲大和か……」

アタシが不良に絡まれていたのに誰も助けってくれなかった。だけど浮雲君は助けてくれた。

「優しいな」

しかも、格好いい。

「転校してくるって言ってたけど……。また会えるかな？　ってアタシ何言ってるの!？」

アタシは頬を赤くした。

大和Side

俺は、今文月学園の学園長室にいた。

「アンタが、今度三年生の主席になる浮雲湊人の弟の浮雲大和かい？」

「は、はい、そうです」

……何か緊張するな。

「さすが、主席の弟さね。去年の学年主席をぶち抜いた成績さね」

「はあ」

「本当ならあんたが学年主席なんだけど……。世界史のテストを名前を無記入したら意味が無いさね」

「畜生!!!!」

何か忘れてる気がしたんだよな。

「まあ、アンタはFクラス所属になった訳だけど、これから試験召喚戦争が起こるかもしれないから、がんばるんさね」

「は、はい」

そうか、そう言えばそんなのがあったな。

「所で、世界史なら今すぐ補給試験を受けることが出来るけど、どうするさね？」

「う、受けます」

……一時間後。

「これは酷いできだね」

「放っておいてください」

世界史は十五点と酷かった。

「他は良いんだけどねえ」

「へいへい」

「所で、アンタに特殊能力を与えてやろうと思っただけど、どうさね？」

特殊能力か……。もらえるなら欲しいかも。

「お願いします」

「じゃあ、アンタに特殊能力を与えるよ。まず、召喚フィールドを

作る力。次に召喚者に痛みのフィードバックを与えたり、無くしたり出来る能力。あと、召喚獣を物に触れさせる事が出来る能力」

……使えるのかな？

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ、早速召喚フィールドを作ってくれ」

「はい、どうすればいいですか？」

「起動と叫びながら科目の名前を念じれば良いさね」
アウェイクン

「じゃあ、古典でやります。アウェイクン起動！！」

出来るかな？

「試験召喚獣召喚」
サモン

そうすると、魔方陣見たいのが現れた。そして、俺の召喚獣が出てきた。

「おつ、成功さね」

「これが俺の召喚獣……」

召喚獣は和服に日本刀を装備した召喚獣だった。

古典 浮雲大和 699点

「ちなみに、注文通り、装備は幻夢にしといたよ」

「あ、ありがとうございます」

そして、俺は手をかざした。

「来い、幻夢」

すると、日本刀が現れた。幻夢、それは俺が持つ、刀。幻夢流の後継者が持つことの出来る刀。

幻夢流とは、幻覚で敵をあざむく流派。あの不良を倒したのも幻夢流だ。

「何というか、大変な事になりそうだな」

俺はそう思った。

第一話「出会い その一」（後書き）

作者の米田です。

今回は優子と大和が初めて出会った話です。

次回は明久も出ます。瑞希も少しだけです。

次回の前に監視者を書きます。

第二話「出会い その二」

大和Side

「さーてと、この後どうしようかな」

今、俺は用事を済ませブラブラしていた。

「買い物でもして帰りますかな……ん？」

『誰か、その人を止めて!!』

前から自転車に乗った男が現れて、明らかに女物だと思われる鞆を持っていた。引ったくりだな。

よし、今回も助けるか。

そう思ったが、俺の前に行動する人がいた。俺と同じくらいの年の俺より背の小さい男だった。

その男は自転車の男に飛びかかったが、すぐに吹っ飛ばされた。
…弱くないか？

すると、自転車の男は逃げようとした。だが、俺はそんな男を逃がそうとはそない。

俺は自転車男の後ろに近づき、首に手刀を叩き込んだ。そして引ったくりは倒れた。

「へぶっ!!」

「たく……引ったくり何かするからだ」

そして、俺は倒れてる立ち向かった男に手を差し伸べた。

「大丈夫か……？」

「うん、大丈夫。っと」

男は立とうとしたがまた倒れた。

「どうした？」

「……お腹すいた」

二十分後。

俺は、今公園にいる。（先ほどの引ったくりは常習犯だった）

「おいしい、おいしいよ」

そして、俺の目の前には笑顔で百円おにぎり×10個を食べてるやつがいる。うん、笑顔で百円おにぎりを食べる人初めて見た。

「僕は、吉井明久。君は？」

「俺は浮雲大和。大和って呼んでくれ」

「うん。僕も明久って呼んで」

明久か、こいつ勇氣あるよな。

「しかし、よくあんな無茶したね。お前も相手と自分の力の差は分かってたろ？」

「まあね、でもああいう人が許せなくてつい」

「そうなんだ」

「所で、大和は高校生？」

「ああ、文月学園の二ーFだ」

「へえ、そうなんだ……って二ーF？」

うん？ どうした？

「実は、僕も二ーFなんだよね」

「そうなのか？」

「うん」

「ちなみに、点数は学年トップだったぞ」

「ええ！！？ そうなの？ あの霧島さんより点数が高いなら何でFクラスに！？」

うん、そんなに驚くことか？

「ちょっと、試験で失敗して……」

「そ、そうなんだ……あ」

「どうした？」

明久の視線の先を見ていると一人の女の子がいた。

女の子は背中まで届く髪が特徴的な女の子だ。年は俺達と同じ年齢みたいだ。

「姫路さん……」

「明久、あの子は？」

「えっと、彼女は姫路瑞希さん。僕と同じ文月学園の二年生。Fクラスに入る予定なんだけど……」

そして、明久が顔を曇らせた。

「どうした？」

「実は、姫路さんは振り分け試験の時途中退席してFクラスになったんだ」

「そうなのか？」

「うん、ウチの高校はそう言うのが厳しいからね。姫路さんは本当ならAクラスに入れるけどね。……僕は実力でFクラスなんだけど、

姫路さんは本当ならAクラスに入れたんだ」

そうして、明久はつらそうな顔をした。

「だから、僕は一学期が始まったら試験召喚戦争を起こそうと思ってる」

「なるほどな、姫路のためか……」

ギクッ！！

「そ、それは」

「なるほど……。姫路の事が好きなんだ」

「う、うん。だから、大和。僕に勉強を教えてくれない？」

「……好きな人のためにがんばるか……。なるほど、気に入った。明久、お前に勉強を教えてやる」

「ほ、本当？」

「ああ、だけど世界史と保健体育は教えられないからな」

「分かった」

……何か楽しそうになりそうだ。

それから、……

「ただいま」

俺は家に帰ってきた。

「お兄ちゃん、お帰り」

「おう、ただいま」

帰ってくると、一番下の弟と妹の秀人と香奈がお出迎えしてくれた。

「兄さん、お帰り」

「おう」

下の弟と妹の英人と華も出迎えてくれた。

「さて、……晩飯でも作るか」

俺の家は普段、親父とお袋は仕事でいないから俺と湊人兄で家事をしている。

そして、祖父、湊人兄を加えて晩飯を食べた。

「今日さ、不良に絡まれた女の子を助けたんだけどさ、可愛かったんだけど……その子に間接を外された」

「うん、大和が女の子の事話すなんて珍しいな」

「うん？ そう？」

そんな事はないと思うけど……。

「で、その子見てどうだった？」

？ 湊人兄がニヤニヤしながら聞いてきた。

「可愛いと普通に思ったよ。あと、胸が痛くなったな……」

「ほほう、それは恋だね」

「ぶっ！！」

お茶を思いっきり吹き出した。

「ここに恋なんてあり得ないだろ？」

「そうか？ 人は恋すると胸が痛くなるって言うぞ」

「そ、そうなの？ 俺分らないんだけど……」

「……お前は真剣に恋したことが無いからな」

恋か、恋なのかこの感情は……。

第二話「出会い その二」（後書き）

どうも、作者の米田です。

最近風邪をひいて辛いです。

……明久の腕輪をどういう能力にすればいいか迷っています。

第三話「Fクラス」

大和Side

桜が咲くこの季節。俺の新しい高校生活が始まった。

「あゝ、桜が綺麗だな。こんな時はサクラエディション聞きたいな」
本当に桜が綺麗だな。

俺は文月学園の前まで来ている。ふと、前を見ると、校門の所に凄い強そうな人（？）がいた。

「お前が噂の転校生か？」

どうやら先生のようなのだ。

「はあ、そうですが、あのあなたは？」

「俺か、俺は生活指導担当の西村だ」

「そうですか、よろしく願います」

いつかこの人と戦いたい思った。

「知っていると思うが、お前の所属するクラスはFクラスだ」

「はい、あの、Fクラスには吉井明久という生徒はいますか？」

「いるが、……どうかしたか？」

「いえ、知り合いなだけで……」

「そうか、取りあえず頑張れ……」

Aクラス前。

「なんだ、ここ」

これは教室ですか？

俺はAクラスの教室の前にいる。どんな教室かと思ったから見てみようと思った。見てみたら驚いた。

「どこかの高級ホテルみたいだな……」

……まあ、いつまでも見ても仕方ないからそろそろ行くか……。

Fクラス前。

「ここは教室か？」

Aクラスとは逆の意味で驚いた。

これ、教室じゃなくて……廃屋だろ。

「取りあえず入りますか……」

ドアを開けて入ってみると……。

「早く座れ！！ このウジ虫野郎「シュッ！！」って危ねえ！！」

俺は俺の事をウジ虫野郎扱いした男に幻覚で作った手裏剣を投げた。男は手裏剣をギリギリで避けた。手裏剣は黒板に刺さった。

「ったく、行き成り人をウジ虫野郎扱いしやがって、お前誰だ？」

「す、すまない。知り合いと間違えた」

「……知り合いならウジ虫野郎扱いしていいのかよ」

俺は、幻覚で作った手裏剣をけして、男を見た。男は短い髪の毛がツンツンしていて、ワイルドな顔が特徴的な男だ。

「俺は、坂本雄二。このクラスの代表だ」

「俺は浮雲大和。大和って呼んでくれ。俺はお前のことは雄二って呼ぶから」

「お、おう。取りあえず適当なところに座ってくれ」

……席すら決まっていらないのかよ。取りあえずあそこに座るか……。

俺は開いてそうなところを見つけた。念のため隣のやつに聞くか。

「あのさあ、この席は空いてる？」

「大丈夫じゃ、空いてるぞい」

「うん？」

隣のやつを見ると木下優子にそっくりな顔だった。だけど、雰囲気
が違うつし、こいつは見た目男だからな……それに木下優子の方が可
愛いからな。

「うん？ どうしたのじゃ？」

「いや、俺は浮雲大和。よろしく」

「大和が良い名じゃな。ワシは木下秀吉じゃ。よく女子だと思われ
がちじゃが……」

「男子だろ」

「……お主ワシを男子として見てくれるのか」

？ 何でそんなに感激したよな顔をするんだ？

「おう、見た目からして男子だろ？」

「う、嬉しいのじゃ。初めて男子扱いされたのじゃ」

「普段どんな扱い受けてるんだ……それより木下」

「あ、ワシのことは秀吉と呼んでくれてよい。なんじゃ、大和？」

「じゃあ、秀吉。お前に双子の姉か妹はいないか？」

まあ、多分。双子だと思うけど。

「ああ、Aクラスに姉上がいるが……知り合いなのか？」

「ああ、春休みの時に知り合ってたな」

そんな時、ドアが開いて誰かが入ってきた。

「すいません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ、このウジ虫野郎が!!」

ん？ 明久か。

「よう、明久。おはよう」

「うん？ あつ大和、おはよう」

「うん、知り合いなのか？」

「まあね」

そして、俺は幻覚で周りにばれない用にして2人で話した。

「明久、雄二がクラス代表なら説得しやすいだろ」

「あれ、もう名前呼び合ってるの？ まあ、そうだよな」

「とにかく、楽しみだな」

そんな中、よれよれのスーツの先生が来た。どうやら担任らしい。

「え〜とおはようございます。私はFクラスの担任の……」

担任の先生は名前を黒板に書くとしたが、チョークがないから諦めたらしい。

「……福原慎です」

どんだけ設備が悪いんだ。

「皆さんに座布団と卓袱台は支給されていますか？ 不備があれば申し出てください」

「センサー、俺の座布団にほとんど綿がありません」

「あー我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足折れています」

「木工用ボンドがあるので後で直してください」

「せんせー、すきま風が入っていて寒いんですけど」

「わかりました。あとでビニール袋とセロハンの支給を申請します」

……なんだよこの教室。

「では、自己紹介でも始めましょうか。まず、廊下側の人から」

廊下側というと、秀吉か。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

へー演劇部に入ってるのか。

その後は適当に聞いていると、小柄の男が出てきた。

「……土屋康太」

なんか、口数が少ないな。だけど、なんかただ者じゃないな。

「あやつはムツツリー二とも言われている」

なんで、ムツツリー二？

「ムツツリスケベの略じゃ」

「そうなんだ」

よくよく見ると色んな物が見え隠れしていた。

「……です。海外育ちで、日本語は会話ができるけど読み書きはできません」

ん？ 女子もいるのか？ 男子だけかと思った。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

……誰だよ。こんな趣味を持っているのは……。女子なのか？

「あつ、し、島田さん……」

「はろはろー。吉井今年もよろしく」

なんて言うか……。天敵って感じだったな。

そんな事を思っていると、俺の番になった。

「俺は、浮雲大和。大和と呼んでくれ。趣味は漫画を読むことだ。特技は剣道。喧嘩が強いやつは掛かってこい」

それで、俺の自己紹介が終わった。次は明久だ。

「吉井明久です。一年間よろしくお願いします」

これであと、坂本と……。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

「「「えっ……?」」」

教室に入ってきた女子生徒を見て、クラスメイトはほぼ全員驚いていた。

第三話「Fクラス」（後書き）

どうも作者の米田です。

明久と瑞希の仲をFF団公認にするかどうか迷っています。

あと、根本は性格を少し改造します。

第四話「引き金」

大和Side

「ちょうど良かった。姫路さん、自己紹介をお願いします」

「は、はい！！ ひ、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

クラスメイトは驚いていた。何故なら彼女はAクラスレベルらしいからだ。このクラスにいる事情は何人かしかその事情は知らない。

「はいっ！ 質問です！」

「あ、は、はいっ。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

その質問、失礼じゃないのか？

「そ、その……振り分け試験の途中退場してしまって……」

それでみんなは納得した。

その後、みんなは、何か言い訳みたいな事を言っているが無視しよう。

「で、では、一年間よろしくお願いします」

そして、明久と雄二の間の卓袱台に着く姫路。……がんばれよ、明久。話しかける。

「き、緊張しましたあゝ……」

「あのさ姫「姫路」」

明久の声が雄二の声と重なった。取りあえず、後で雄二をぶん殴るか。

その後は適当に聞いていた。すると……。

「……俺の知人に明久に興味がある奴がいたな」

雄二がそんな事を言っていた。

「えっ？ それって誰」

「そ、それって誰ですか!？」

うん？ 明久はともかく何で姫路が反応したんだ？ もしかして、姫路も……。

「確か久保……利光かな」

……明久が絶望した顔をしている。姫路は安心してるな。

「あ、その人達、静かにしてくださいね」

「あ、すいません」

そしたら、先生が教卓を叩いた。そして教卓がバラバラになり、ゴミ屑になった。

「え……替えを用意しますので待っていてください」

そうして、福原先生は教卓の替えを取りに行った。

どんだけ設備悪いんだよ、ここ。

「……雄二ちよつといい？」

「ん？　なんだ？」

「ここじゃ、話にくいから廊下で」

明久は雄二と廊下に出て行った。俺は取りあえず、姫路に話しかけるか。

「よう、君は姫路瑞希だね」

「は、はい。えつとあなたは？」

「俺は浮雲大和。一年間よろしく」

「はい、よろしく願います」

そこで俺は気になる事を聞いた。

「ところで、姫路」

「はい？」

「姫路は明久の事……好きか？」

「ふええ！！??」

はははは、驚いてるよ。

「う、浮雲君、何でそのことを？」

「うん？ 何となくかな。だけど安心しろ俺は、姫路と明久の仲を応援するつもりだから」

「あ、ありがとうございます」

……さてと、こいつらに幻覚を見せておいて、明久達の方に行く俺。もちろん、簡単に幻覚で身を隠す。

「……姫路のためか？」

「ど、どうしてそれを!？」

明久が慌ててるな……。

「お前は単純だからなカマを掛けたんだ」

「そんな理由じゃ……うん？」

明久が何かに気がついた。やはりな。

「どうした？」

「……大和、そこにいるんでしょう？」

「あ？ お前何言って……」

「よく見破ったな。まあ、これくらい見破れない用だと困るけど」

「なあ？」

明久と雄二には俺の姿を見えない幻覚を見せた。まあ、低いレベルだったからこれぐらい明久は見破ると思った。明久には春休みの時に幻夢流を教えたから。

俺は幻覚を解いた。雄二はまだびっくりしていた。

「まあ合格だね」

「馬鹿な、大和お前姫路達と話をしているじゃないのか？」

そう、俺は姫路達と話をしている。だけど、それは幻覚だ。

「ああ、あれは幻覚を見せてるだけだ。そばにいと見せかけた幻覚だ。お前にも見せてた」

「……成る程な、お前があのだ神ってあだ名の」

「あ？ 何か言ったか？」

「いや、別に何も。そろそろ戻るぞ」

あ、先生が戻ってきたな。

「じゃあ、最後にクラス代表の坂本君お願いします」

「了解」

そうして、雄二は教卓の前に立った。

「クラス代表の坂本雄二だ。代表とでも坂本でも好きな呼び方で良い。ところで皆に聞きたい事がある」

みんなのことを見渡して雄二は言い放った。そして教室を見渡す雄二。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクリーニングシートらしいが……」

一呼吸を入れて言い放った。

「不満はないか？」

「「「大ありじゃあ!!!!!!!!!!!!!!」」」

『そうだそうだ!』

『Aクラスも同じ学費だろ? あまりにも差が大きすぎる!』

「みんなの意見はもつともだ。そこで代表としての提案だ」

そして、一端、一息を入れる。

「……FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思っ」

戦争の幕が開いた。

第四話「引き金」(後書き)

あと二回でDクラス戦が始まります。

朝、凄い寒いですね。

第五話「鬼神と幻神」

大和Side

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいれば何もいらない」

たぶん、姫路にラブコールしたやつは後で明久がぶっ殺すだろう。

「そんなことはない。俺が勝たせてやる」

『何を馬鹿な事を』

『できるわけがない』

『何の根拠があつてそんな事を』

そりゃあそうだろ、AクラスとFクラスの点数の差が大きすぎるからな。

「根拠ならあるさ、このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

？それってどんな要素なんだ？

「それを今から説明してやる」

そして、ムッツリーニに視線を合わせる。

「おい、康太。畳に顔を付けて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ぶんぶん）」

「は、はわっ」

………凄く否定してるけど………バレバレだろ。

「土屋康太。こいつがあ有名な沈黙なる性識者だ」
ムッツリーニ

「……………！！（ぶんぶん）」

『ムッツリーニだと………？』

『保健体育では学年一位のやつか？』

凄いな、保健体育で一位って。

「それに、姫路は实力はみんなの知ってる通り、ウチの主戦力だ」

「わ、わたしがですか？」

『そうだ、俺達には姫路さんがいる』

『彼女はAクラスにもひけをとらない』

『ああ、彼女さえいれば何もいらない』

先程から姫路にラブコールしてるやつ明久に殺されるぞ。

「それに木下秀吉もいる」

『おお……！！』

『ああ、アイツ確か、木下優子の……』

『演劇部のホープ』

「当然俺も全力を尽くす」

『確か、坂本って小学生の頃は神童って呼ばれていたんだろ？』

『Aクラスレベルが2人いるって事か。これならいけるんじゃないのか？』

おお、士気が上がってるな。

「それに……」

雄二が少し黙る。

「浮雲大和がいる」

「おい！！ 何で俺の名を出す！！」

俺の名を出す必要ないだろ？

『浮雲って確か転校生だよな』

その通りです。

「確かに大和は転校生だ。だが、あいつの通り名は……鬼神だ!!」

『『『な、何だって!!!!?』』』

うん?　ここまで俺の通り名は有名なのか?

鬼神というのは俺の喧嘩の強さからきた通り名のようなだ。

『鬼神って都市伝説じゃなかったのか?』

『まさか、存在しているとは』

「それだけじゃない、こいつは……、鬼神だ!!」

『『『ええええええええええええ!!!!!!!!!!』』』

…….　どんだけ、俺の噂が流れているんだ?

『げ、鬼神だと!?!』

『幻神と鬼神は同一人物だったのか』

「俺も先程まで知らなかったが、こいつは幻神だった」

「あのう……」

「どうした姫路」

姫路が何故か手を挙げた。

「幻神って何ですか？」

まあ、知らないのは無理ないな。

「幻神というのは一種の都市伝説だったんだ。幻覚を見せて戦う強い奴がいるって言う」

「幻覚？」

「つまり……」

「「こういう事だ」」

『『『『えっ！？』『』『』』』

俺は立ち上がったただけだが、クラスメイトは驚いた。何故なら、俺が2人いたからだ。

クラスメイトには急に教壇の所にもう1人、俺が現れた風に見えたからだ。

「……本当にすごいよね大和」

「明久にも出来るようになるさ」

「これで、わかったろ。こいつのすごさが。さらにこいつの兄は三年の主席だ」

『『『何!?!?』』』

本日二度目の驚き。

「それにこいつの成績は翔子より良かった」

『こ、これならいけるんじゃないか』

『勝てる。Aクラスに勝てる』

盛り上がってるね。

「それに吉井明久もいる」

シーン。

士気が一気に下がった。

「ちょ、何でそこで僕の名前を出すの」

『吉井明久って誰だ?』

「みんな知らないのか……なら教えてやる。こいつの肩書きは観察処分者だ」

あれ? 観察処分者って……。

『それってバカの代名詞じゃないのか』

そうだよね。

「そうだ、バカの代名詞だ」

「肯定するな！！ バカ雄二ー！！」

「あの、それってどういう事ですか？」

まあ、姫路には関係ないよな。

「簡単に言つと問題のある生徒に教師の雑用をさせる制度だ」

「雑用ですか、どうやって？」

「まず、召喚獣が物に触れる」

普通、召喚獣は物に触れないからな。

「それって凄いですね。 召喚獣は人の何倍の力がありますから」

姫路が羨望と尊敬のまなざしを明久に向けた。 だけど、明久は……。

「そんな事はないよ、先生の許可が無いと召喚できないし、それに…… 痛みのフィードバックも来るし」

そうだったな。

『じゃあ、おいそれ召喚獣を出せない奴がいるのか』

「まあ、気にするな。いてもいなくても対して変わらない雑魚だ」

酷いな雄二は。

「言っておくけど明久の成績は俺が春休み勉強を教えて上がつてるぞ」

『『『な、何iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』』』

「う、嘘だろ!?!」

驚いているな。

「と、とりあえずDクラスに宣戦布告する。明久、使者の役を頼む」

……雄二の表情から明久に酷い目に遭わせようという思いが感じられるな。

「明久に使者を頼んでストレス発散か。酷いねえ」

「何故それを!?!」

「図星かよ、まあいい、明久行くぞ」

「OK」

俺と明久は幻夢流、移動術『瞬』を使った。クラスメイトには消えた様に見えただろうな。

『『消えた!?!?』』』

そして、Dクラス前。

「よし、明久。入るか」

「そうだね」

Dクラスのドアを思いっきり開けた。

「Dクラス代表はいるか?」

すると、ドアの近くにいる男子が手を挙げた。

「俺が代表の平賀だけど。君たちは?」

こいつが代表か。

「俺達、Fクラスは本日午後より、Dクラスに試験召喚戦争を申し込む!?!」

『『『はあ!?!?』』』

「では、さらば!?!」

俺達はまた幻夢流移動術『瞬』を使いFクラスに戻った。

『『『消えた!?!?』』』

Fクラス。

「戻ったぞ」

『『『早っ!!』』』

第五話「鬼神と幻神」（後書き）

どうも、米田です。

今日は家族達はイルミネーションを見に行ったのだけど、自分はいきませんでした。

高校の近くなので知り合いに会いたく無いからです。

あと、……自分が黄昏れるのが目に見えているから。

第六話「Dクラス戦その一」

大和Side

あの後、俺達は屋上に移動した。メンバーは俺、明久。雄二に秀吉、ムツツリー二。島田に姫路。

「一応、午後に開戦にしといたぞ」

「ああ、ご苦労」

とりあえず、お昼にする事にした。ちなみに俺は手作り弁当を持ってきた。

「さてとご飯ご飯」

「うん？ 明久お前、弁当持ちなのか？」

「うん、そうだけど」

「珍しいな。お前普段の主食って水と塩だよな」

「明久君よく生きていきますね……」

まあ、そうだよな。

「俺が勉強を教えた時、家計簿をちゃんと取るように説教したからな」

「そ、そうなんですか。あの、明久君」

「えっ!？」

いや、姫路積極的だね。

「いいの姫路さん？」

「は、はい。よろしかったら皆さんもいかがですか？」

姫路は尽くすタイプだね。

所で、島田が姫路のことをライバルの様に見ているのは気のせいかな？

「雄二、Dクラスと戦うのには何か理由があるのか？」

「ああ、次のBクラス戦に利用使用とな」

何を考えているか分からないな。まあ、いい。

「いいか、お前達。俺達のクラスは最強だ」

何を根拠に言っているんだ？

「おもしろそうじゃない」

「Aクラスの連中を引きずり出してやるのじゃ」

「が、頑張ります」

「……（コクコク）」

いやー楽しそうだね。

「よし、作戦を説明するぞ」

午後

「吉井、木下達がDクラスと渡り廊下で交戦状態になったわ」

「よっしゃあ！！行くぞ明久！！」

「うん！！」

俺と明久はテンションが上がり、戦場に向けて走り出した。

「……何でそんなにテンション高いのよ」

何でだって？ 戦いが好きだからだよ。

「明久、大和。来てくれたのか」

「秀吉大丈夫か？」

「かなり、召喚獣は疲労しておるが戦死は免れておる」

「そうか、じゃあ点数補給に行つてこい」

「わかつたのじゃ、ところで、……」

そして俺の後ろを見る秀吉。

「島田達はどうしたのじゃ？」

「あれ？」

後ろを振り返ると誰もいなかった。

「みんな……逃げちゃったね」

「後でしばるか」

そして、なぜか島田がいない事に不満そうな秀吉。

「まあ、いい行くぞ明久！！」

「おう！！」

俺達は勇敢に（無謀）に渡り廊下に2人で突撃した。

「覚悟しやがれ！！ Dクラス！！」

「吉井く！！ 浮雲！！」

なんと、島田達が戻ってきた。

「島田、戻ってきたのか」

「うん、色々あってね」

？ 何があつた？

「取りあえず、派手に戦おうぜ！！」

さて、俺の相手は誰だ？

「田中先生！！ Dクラスの坂田が世界史で試験召喚勝負を申し込
みます。試験召喚」

げええっ！！ 世界史かよ！？

「くっ、試験召喚」

Dクラス 坂田肇 世界史 96点

Fクラス 浮雲大和 世界史 15点

『『『雑魚だ、こいつ』』』

「なら、起動」

俺は召喚フィールドを作成した。

『『『フィールドが消えた！？』』』

「須川！！ 田中先生を拉致しとけ！！」

「了解！！」

須川に田中先生をFクラスに拉致して貰った。

「さてと、どうするか」

ふと、島田の方を見ると召喚獣が戦死しそうだ。助けに行こう。五十嵐先生だから化学か。

「五十嵐先生、Fクラス浮雲が試験勝負を申し込みます。サモン試験召喚」

Fクラス 浮雲大和 化学 465点

Dクラス 清水美春 化学 41点

『『『400点超え！？』』』

俺の召喚獣が一撃で清水という生徒の召喚獣を倒した。

「戦死者は補習！！」

あ、西村先生。

先生はDクラスの生徒をどこかに連れていった。

「島田、大丈夫か？」

「ええ、何とか」

「じゃあ、補給に行つてこい。それじゃないと、持たないぞ」

「……わかった」

島田はFクラスに戻っていった。さて、次の相手は。

「くっ、Dクラス坂田がFクラス、浮雲大和に日本史で勝負を申し込む」

あゝどうやら俺は歴史が苦手だと思われるのか。

「あゝ日本史調子悪かったんだよな。……普段に比べて」

Dクラス 坂田肇 日本史 119点

Fクラス 浮雲大和 日本史 2000点

『『『2000点だと!?!?』』』

あっさりと敵を倒しちまったな。

「さて、次の相手は誰だ?」

『『『化け物がこいつ』』』

そんな事はないとおもっ。

第六話「Dクラス戦その一」（後書き）

なんとかDクラス戦に入りましたが、明久が召喚してない……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3118z/>

バカと幻夢と召喚獣

2011年12月25日15時52分発行